

能楽雑感（166）～ 破裂音

破裂音～能楽雑感（166）

去る10月29日、「稲門観世会の勉強会」が4年ぶりに開催され、参加しました。過去2回、この会で発声法に関する講義を早稲田大学名誉教授の竹本幹夫先生から受けて、世阿弥の説く「横（おう）音」、「豎（しゅ）」、この両者を混合させる「相（あい）音」について知ることができましたが、これを契機に、私自身の発声法についての悩み・知識・経験などを文章化し、小欄にも掲載した経緯があります。

今回は、竹本先生のほかに、演劇人を主対象に発声法を指導している岡本章氏をゲストに迎えて「現代演劇の発声法から学ぶ」をテーマにお話を伺いました。

岡本氏の講和の中で出てきた単語で「破裂音」というのがありました。そして破裂音の典型的な言葉として取り上げられたのが「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」でした。

帰宅後、Wikipediaなどで調べてみると、「閉じた声門を一気に開放して、呼気とともに一気に発声した声」ということになっています。

「閉鎖音」とも言われるそうですが、これは声門を閉じ状態からの発声から名づけられたものと思われま

しかし、私に言わせれば、両者は発する呼気の強さで違うのではないか。勿論、破裂音のほうが、より瞬間的で、より強いものであると理解しています。

ところで、破裂音という言葉は今回初めて耳にしたのですが、実際には謡曲の稽古の場でそれを教えてもらったのは65年前のことでした。

最初にその体験をしたのは、「鶉飼」のなかで二か所も出てくる、「・・・ばっと寄り・・・」と「・・・ばっと放せば～」の箇所です。

私の最初の師匠であった大叔父の平戸久也から指導を受けました。（久也20訓と題して教えられたことを小欄に書いてきましたが中断しています。あくまでも中断であり、やめた訳ではありません）

この時の久也の指導は以下の2点でした。

- ① 「ば」の発音には気合が必要である。
- ② 但し、このような類似の発音は随所にあるが、役柄や情景に応じて強さを加減すること
- ③ 「ば」と「つ」の間に「ツメル」という注釈があるが、鶉飼に限らず、ツメルの注釈があったら、そこは「間」であるから、母音を出してはいけない。

こうしたことに神経を使うのは、概ね「詞」の部分です。音楽性が優位な「謡」に対して「詞」は物語性（ドラマ性）が強いので、発声×発音×強弱の要素が出来不出来に大きく影響して来ます。（続く）

能楽雑感（167）～ 臍下丹田

臍下丹田～能楽雑感（167）

前回ご紹介した発声学の権威である岡本章氏によると、発声は喉や口唇だけでなく、身体全体で行うものであるとして、以下の注意点を挙げていました。

- ① 集中すること（心身一体化）
- ② 腹式呼吸をおこなうこと（特に吐く息の重要性）
- ③ 臍下丹田を意識すること（上虚下実）

これらのうちの①と②は、謡曲を謡うときの基本ですから、当たり前のこととして別に気に留めるほどのことではありませんが、③については、異論を唱える人もいなくはなく、私もその一人です。

臍下丹田という言葉をもっとも最初に聞いたのは、高校時代。剣道部に入って最初の頃の時期に、竹刀を晴眼に構えるときには臍下丹田に力を入れなさい、と指導されたのがはじめてであったと記憶しています。そうすることで、裂帛の気合を入れることが容易ですし、これは、謡曲の発声にも通じることは事実でしょう。

しかし、そうは言っても、一体、臍下丹田と言ってもその場所を特定しにくい嫌いはあります。へそ下一寸あたりとか言う説もありますが、仮に、自分の場所を見つけたとしても、そのあとどうするのか？下手に下腹部に力みを入れると、それが放屁の誘因ともなりかねません。

もう一つ、臍下丹田を意識したとしても、そのこと自体が身体の推進力にはなり得ないのではないかとの疑問です。剣道においても、仕舞においても、身体を前に押し出す力の根源はどこにあるのかずいぶん迷いました。

私の場合、臍下丹田という意識は捨て去って、代わりに、脊椎（いわゆる背筋）、それも尾骶骨から拳一つほど上のあたりを意識することで、それなりの効果をあげることができました。これは、謡においても、仕舞においても一定の効果があることは明らかです。

しかし、高齢化に伴う身体の劣化には贖いきれず、ある時、自分の舞姿をビデオ映像で見て、ショックを受けました。横から見ると身体の線の湾曲が著しいのです。

よく謡会などでも、高齢の方が見台の前で、肩を落として蹲るような姿勢で謡っている姿を見ますが、やはり背筋を伸ばして謡わないと腹式呼吸ができません。

自分のカメラ映像のような姿勢を矯正するにはどうしたら良いか。考えた末に、意識的に肩甲骨を内側に狭めるように心がけることにしました。

こうすることで首筋から尾骶骨までが直線に近い形状になり、仕舞の姿勢を正すだけでなく、見台の謡本を見るときも、蹲る姿勢は防げるのではないかと。

でも、言うは易く、実践となるとなかなか・・・。（続く）

能楽雑感（168）～ カタサバ

カタサバ～能楽雑感（168）

発音、発声のことに話を戻します。

勉強会の後席で、発声X発音のことが話題になったのですが、藤波門下の流友が、かつて、藤波順三郎師が発音で注意すべきは「カサタバ」である、とおっしゃたことが披露されました。その昔、私も聞いたことがあります、すっかり忘れていました。

要は、発音で特に注意すべきは、カ、タ、サ、バの行であることを指摘しているのですが、このほかの行の発音も、それぞれに変化形がありますから、すべて難しいといえば難しいのです。

個人的に言えば、ア行とカ行、中でもアとカの発声には気を使います。

「ア」に関しては、以前小欄で書きましたが、「井筒」のシテの次第「暁ごとの・・・」のところは、シテの最初の発声であるだけに、ずいぶん悩みました。

おまけに、「ア」の次が「カ」ですから、カの発声との連動とか接点についても気を使わなくてはならないのですが、考えたらきりがなく、頭が混乱してきます。

最近、気になってしまうのが、詞の最後にくる「カ」の発声。

これがまた、千差万別の態様があって、相手に向かって言っている時でも、大別して、疑問、脅し、確認などがあります。

相手なしの自分自身の述懐であっても同じ。「発声X発音」に加えて、声量の多寡の要素を加えると、それらの組み合わせの数は飛躍的に多くなります。

流友で、詩の朗読を習っている方、中国語を勉強している人方がおりますが、お二人とも謡曲の表現力は抜群です。つまりは、声の表現を中心としている音曲においては、ジャンルを問わず、同じようなものだといえるでしょう。

ただし、安心できるのは、芸の世界においては、上手下手は唯一絶対のものではなくて、相対的な価値であることです。つまり、独り善がり可能なのです。(完)